街のオアシス再発見 第7回

長い歴史を誇る　函館公園（函館市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

函館山ふもとのなだらかな傾斜地に広がる函館公園は、住宅地に囲まれ落ち着いたたたずまいを感じさせます。

北海道の公園の歴史は函館から始まりました。人々が憩う広場の必要性を説いたのは、函館駐在の英国領事リチャード・ユースデンです。実業家の渡辺熊四郎（わたなべくましろう）はその熱意に動かされ、大口の寄付を申し出ます。明治以降、城跡を公園にするケースが多い中、函館は住民の労働奉仕で造り上げました。

函館市青柳（あおやぎ）町に開園したのは1879年。以来145年を経過した今も、造成当時の原形が残っています。住民が築いた見晴らしのいい明治山（通称すりばち山）からは、津軽海峡、さらには下北半島を望むことができます。

園内の旧函館博物館１号は現存する博物館建築では国内最古、白川橋は北海道最初の洋式石橋です。こうした遺産を抱える函館公園は2006年、登録記念物として国の文化財に登録されました。

明治山から見える公園。海の向こうは下北半島

啄木が好きだった場所

明治山の下に立つのが石川啄木（いしかわたくぼく）の歌碑です。啄木は文芸仲間を頼って1907年５月５日、生まれ故郷の岩手県から函館にやってきます。

２年前に詩集「あこがれ」を出すなど当時は詩作に没頭していましたが、仲間から歌会に誘われ、短歌をつくるようになります。函館の歌仲間がいなければ、後の歌集「一握の砂」「悲しき玩具」は誕生していなかったかもしれません。

歌碑は丸井今井函館支店が建立し、除幕式は啄木の命日である1953年４月13日に函館啄木会の主催で行われました。

碑には「函館の青柳町こそかなしけれ　友の恋歌

啄木の歌碑。風化で文字は判読できない状態

矢ぐるまの花」と刻まれています。青柳町は啄木が暮らし、歌仲間が住んでいた場所です。「かなしけれ」は「悲しい」のではなく「いとしい」という意味です。歌仲間で啄木が亡くなるまで資金援助を続けた宮崎郁雨は、除幕式のあいさつで「このすりばち山にもよく一緒に上ったもので、彼の好きな場所でした」と思い出を披露しました。

啄木は当初、一人で函館に来ていましたが、1907年７月７日に岩手県から妻子を迎え、同じ青柳町で新居を構えました。さらに８月４日には青森県から母カツを呼び寄せ、９日には小樽から妹が病気療養のため訪れます。６畳２間の借家に５人が暮らすにぎやかな生活となりました。

新居は函館公園から北へ歩いて数分の場所で、付近には「石川啄木居住地跡」の案内板が立っています。

啄木居住地跡の案内板。住んでいたのはこの近く

弥生尋常小学校の代用教員だった啄木は８月18日から函館日日新聞でも働き始めます。しかし、１週間後の25日、函館大火に見舞われます。自宅は延焼を免れますが、学校も新聞社も焼け、働き口を失います。

函館の暮らしに見切りをつけた啄木は札幌の新聞社で働くため９月13日、単身で函館を離れます。４カ月余りの滞在でしたが、日記には「知る人一人もなかりし我は、新しき友を多く得ぬ」（「啄木全集　第五巻」筑摩書房）と感謝の気持ちを表しています。

そして旅立ちの日、友人たちに見送られ、列車の中で「函館の燈火漸やく見えずなる時、云ひしらぬ涙を催しぬ」（同）と書いています。こうした啄木のいとおしい思い出が、歌碑にこもっているのです。

妻が最後に暮らした地

公園の東隣の住宅地は啄木の妻節子が最後に暮らした場所です。

節子は盛岡女学校時代、盛岡中学に通っていた啄木と知り合い1905年、啄木19歳、節子18歳の時に結婚しました。翌年には長女京子を出産、1907年には夫と暮らすため函館へ向かいます。

３人で一緒に暮らしたのは、義母カツが同居するまでの１カ月間でした。生活に余裕はなく、啄木が青森県にカツを迎えに行く費用は、節子が自分の着物を質入れして工面しました。

窮乏生活はその後も続きます。啄木は仕事を求めて札幌、小樽へと転居、小樽で家族を呼び寄せますが、また一人で釧路へ旅立ちます。釧路からは満足な仕送りがなく、義母は娘婿の家に身を寄せ、節子は火鉢も買えず、娘と七輪で冬を過ごしました。

啄木が上京を決意すると、残された家族３人は再び、函館に戻り、宮崎郁雨の世話で借家暮らしを始めます。郁雨の援助を心苦しく思った節子は小学校の代用教員として働きます。

東京の新聞社に勤める啄木からは家族を呼び寄せる連絡が来ません。せきたてる義母に従い1909年６月、一家で上京します。

節子が暮らしていた函館公園の隣接地付近

しかし、義母とは折り合いが悪く、確執が続きます。そして、不幸も待ち受けていました。1910年10月４日に誕生した長男真一は27日に亡くなります。1912年３月７日には義母が肺結核で死亡。啄木も同じ病に侵され４月13日、26歳で他界します。

失意に暮れる中、節子は６月14日、次女房江を出産します。幼子２人を抱え困窮した母は、函館に転居していた実家を頼る以外にありませんでした。

同年９月、函館に戻った節子は函館公園脇の青柳町で親子３人の生活を始めます。目の前の公園は長女京子にとって絶好の遊び場でした。家の近くには鉄棒やブランコがあり、子どもたちがいつも集まっていました。

京子が遊んでいた場所は現在ミニ動物園に

しかし、この地での暮らしも長くは続きませんでした。石川家を襲った肺結核は節子の身体をむしばみ、1913年１月には入院するまでに悪化します。病床の節子が気掛かりだったのは、東京に置いてきた啄木と義母、長男の遺骨でした。

自分と一緒に函館で埋葬するため、知人に引き取りを依頼します。遺骨が函館に届いたのは同年３月27日。願いをかなえた節子は、それから１カ月余りたった５月５日、啄木と同じ26歳で息を引き取りました。

啄木一家は海を見下ろす立待岬の墓園で眠っています。節子の強い希望がなければ、函館に啄木の墓が建つことはなかったかもしれません。

現役国内最古の観覧車

公園内にはミニ遊園地「こどものくに」があります。1954年の北洋博で使われた遊具を移設して1956年に開園しました。メリーゴーランドやミニ新幹線などが子どもたちを楽しませています。

中でも、目を引くのはレトロ感あふれる観覧車です。1965年に大沼公園から移設されました。大沼公園の湖畔に設置されたのは1950年。湖面に浮かぶ島々を一望できる「空中観覧車」として人気を集めました。

高さ10㍍、直径８㍍の８角形で、２人乗りの長いす型ゴンドラが８台付いています。２人が同じ方向を向いて座る長いす型は日本では珍しく、稼働している観覧車では国内最古です。2019年、国の登録有形文化財に指定されました。

１周３分45秒。歴史のある公園ならではの古参（こさん）遊具は、時を刻むようにゆっくりと回り続けています。

レトロ感が漂う現役国内最古の観覧車

優美な「高田屋の松」

公園の入り口右手にあるのが通称「高田屋の松」です。函館ゆかりの豪商高田屋嘉兵衛（たかたやかへえ）が1801年、宝来町の屋敷に庭園を造り、高田屋御殿と呼ばれていました。1878年ごろ、函館公園を造設する際、屋敷から移植されたのがこのクロマツです。

「鶴亀の松」ともいわれ、当初は入り口の左にも１本あったのですが、1914年の大火で枯死し、1916年に植え替えられました。

高田屋の松は推定樹齢200年を超える古木（こぼく）で、太い幹に支えられた重厚で美しい枝が横に広がっています。1972年には北海道の記念保護樹木に指定されました。

クロマツの名前は樹皮が黒っぽいことに由来します。これに対し、赤っぽいのがアカマツです。いずれも日本を代表するマツで、クロマツを「雄松」、アカマツを「雌松」とも呼びます。

針状の葉２本が１束になって枝から伸びるのは同じですが、違いは葉先の感触です。アカマツは手を触れても刺激はありませんが、クロマツは痛みが走り触れません。

本州以南の海岸沿いに自生するクロマツは、潮風に強いことから、防風林や防潮林として植栽されています。強風に耐え、曲がりくねりながら成長する姿が好まれ、昔から庭木として人気を集めてきました。高田屋の松もそうした優美な一本です。

風格を感じさせる高田屋の松

函館市湯川町１の漁火（いさりび）通に面した一帯には「湯川黒松林」があり、約900本のクロマツが植えられています。海岸の砂が津軽海峡からの風で舞い散るのを防ぐため、渡辺熊四郎が函館公園開設後、私財を投じて造林したものです。北海道では珍しいクロマツ林は公園として整備され、憩いの場となっています。

道南ならではの竹林

公園の中央部には竹林があります。公園開設時に寄贈されたタケを植えましたが、間もなく枯死しました。現在あるのは、付近の住民が1957年に東京の知人宅のモウソウチクを株分けして持ち帰り、そのうちの７株を市に寄贈したものです。地下茎が発達し今では200本余りに増え、北海道では珍しい竹林になっています。

モウソウチクは中国原産で1700年代前半、薩摩藩が移入しその後、各地に広まったとされています。名前は中国三国時代、母のため冬にタケノコを手に入れた呉の孟宗（もうそう）の故事にちなんでいます。

国内では最も大きいタケで、ほかのタケは節が２輪なのに対し、モウソウチクは枝の出ない節が１輪なのが特徴です。モウソウチクのタケノコは味がいいため人気があり、栽培も盛んです。公園でも春になると、タケノコが地面から顔をのぞかせます。

栽培の北限は北海道南部で、松前町などでも竹林を見ることができます。温暖な地域ならではの光景です。

北海道では珍しいモウソウチクの林